

特集：2008年度日本数学会出版賞受賞者のことば

大竹進氏

このたびは日本数学会の出版賞をいただき大変光栄に存じます。いままでこのような賞のことは考えたこともなかったので、なにかの間違いではないかと思いました。いつの間にか編集者として50年あまりを過ごしてきましたが、私の人生の勲章とおもい深く感謝しています。

いまあらためて編集者として振り返ってみますと感無量です。最初に出会ったロシア語の本は「ソビエト教育アカデミー編，基礎数学全6巻（12分冊），小倉金之助監修」，つづいて「ソビエト科学アカデミー編，数学通論，遠山啓監訳」でした。いままでこれほど分かりやすく丁寧な解説書はみたことがありませんでしたので感激し，ソビエトの数学にのめりこんでいきました。先日出版賞受賞の会場で名古屋大学の浪川教授が高校時代に「基礎数学」を知り，数学が好きになったと挨拶され，ほんとうにうれしかった。1950年代ソビエトでは一流の数学者が青少年向けの「数学普及叢書」のシリーズを編纂していました。これを「数学新書」シリーズとして刊行して行ったのですが，当時は数学が分かりロシア語のできる訳者は少なく，宮本敏雄先生を中心に若手の高校の先生を加えて訳稿を回し読みをし，1冊の訳書ができるまでに半年から1年はかかりました。校正はいつも赤字で一杯で，印刷所の職人さん泣かせでトラブルは日常茶飯事で私も休日もないほど大変でした。しかしあるとき女子中学生から手紙をもらいました。「... 図書館で数学新書の数学玉手箱を知り数学が好きになり，どうしてもこの本が欲しくなり神田中を探し回りました。やっと手に入れたときはうれしくて泣きながら家に帰りました...」。編集者として50年前のこの手紙のことはいまもはっきり覚えています。多くの先生方や読者に支えられて編集者として続けてこれたのは本当に幸せだとおもっています。もうすぐ77歳ですが生涯現役で頑張りたいとおもいます。

大竹 進（大竹出版）